

---

# 気分屋な僕

砂鈴

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

気分屋な僕

### 【Nコード】

N9070C

### 【作者名】

砂鈴

### 【あらすじ】

高校生になった主人公。待ち受けているのはどんな日々??

## No.1 主人公と変態

季節は春。

桜の花びらがチラハラと散り始める頃、俺こと沖田忍はウトウトとしていた。今は入学式の最中だというのだ。おきたしのび

そんな忍君は中性的な顔立ちに女子が羨むほどのサラサラとした黒髪の持ち主でした。その容姿はため息が吐くほどのものだというのに本人はどこ吹く風とゆっくり舟を漕ぎ始めているのです。

忍君が今日から通うことになった学校は歴史の浅い私立高校でした。

さてさて、忍君はどうしてこの学校に決めたかというところから一番近いという理由でした。（それでも電車を乗って来なければならぬ）

そろそろ主役に登場してもらわないと間が持ちません。ということで主人公視点にしたいと思います。

ん？ ああ、やっと僕の出番ですか。ええ、とりあえず今は起きてますけどこの暖かい春の陽気にいつ負けてもおかしくはありません。そんな状況の僕です。

この学校の入学式はなんだか堅苦しくて暇です。なんか背伸びをして厳格な学校に見せようと見栄を張っているような気がします。かれこれ式が始まって一時間。そろそろ終わるはずなんですけどねえ。

今日はこれで学校は終わりだから帰って我が妹の手料理を食べなければいけないのだ。妹のジェシファアひかりじゃなくて光の手料理は一級品だよ。あれを楽しみに一日を頑張っているようなものだ。

僕が今日の昼ご飯はなんだろうとあれこれ考えている間に式は終わったように少し遅れて立ち上がり退場する。

僕が今日の任務は終了だな、と思いきさつと我が家へ帰ろうと思

つているところに女好きの変態が一人近づいて来る。

僕は危険を感じ逸早く体育館を出ようとするが人ごみに溢れかえっていた出口に阻まれた。その間に変態さんに追いつかれてしまった。

「よッ、シノブ君ッ」

僕にとって不幸中の幸いともいうべきことは一つ。この変態さんが機嫌が良いことだった。これならば案外早く帰れそうだと思った。

「なあシノブ、ちゃんと紹介してくれよ」

少し罪悪感を感じた僕は渋々頷いた。まあ、いつまでも変態さんではかわいそうだし言い難いとも思っていたのでちょうど良い。

この親友面をしている女好きの男は市原誠也<sup>いちハラセイヤ</sup>。女好きと言いながら変なところで一途な男である。スポーツが得意で、この高校にもスポーツ推薦で通ったラッキーな奴だと覚えておいてくれれば問題ない。

「こんなもんでいいよね」

僕が爽やかぶった笑顔でそう問い掛ける。爽やかスマイル、自分でも不細工なんだろうなあと思う。大体、上手く笑えているかどうか分からない。

「親友の後にいらないものが付いていたのが気に入らない」

少し拗ねてしまったこの男。僕はスタスタと人がいなくなつて空いてきた出口に向かって歩いて行く。後ろで放置プレイですか、という声は聞こえなかったことにしておこう。

外は太陽が出ていてまさしく小春日和という天気だった。式で縮こまった体を伸ばす。気持ち良いもんだなあ、と思った。

変態の誠也からも開放されたし、あとは我が家で待っている光と昼ご飯のために真っ直ぐ帰ることだ。そう思っ学校を出て行きました。そんな彼を見ている人がいるとも知らずに・・・。

## No.2 不幸な少女はだあれ？

ゴトゴトと心地よい揺れが僕を眠りへと誘う。いざな

混雑する電車の中で運良く座ることができた僕は朝ということもありウトウトとしているのである。

今日からは普通に授業があるのでちょっと楽しみでもあり憂鬱でもある。

ふと目を上げると学生が沢山乗っている。同じ制服もあれば他校の制服を着た生徒もいる。

僕は周りを見回していたがある人物に気付き俯く。気付かれないなければ幸いだがいっつは目ざとく見つけるだろう。

「奇遇だねえ、シノブ。同じ電車だったとはな」

ほらッ。ラッキーで受かった誠也君はまたもやラッキーで僕を見つけたようだ。どうして僕はこの時間の電車に乗ってしまったのだろうか。

「今日についてないな」

僕はボソッとそう言ったが誠也には聞こえなかったようだ。それにしてもこいつはさっきからニヤニヤと周りを見ている。はつきり言つと気持ち悪い。

「その目を止める。ニヤニヤ笑いも止める。電車で浮かれるとはお前はいくつだ」

電車ではしゃいで許される年ではないはずだ。僕がそう思うって言う誠也は心外だと言わんばかりのジト目で見てきた。なんなんだ？

「お前は何も分かっていない。こうやって電車に乗っている女の子を見て可愛い子を探しているんだよ。実に有意義な時間の使い方だろ」

自信満々でそう言うてくる誠也。止めてくれッ、僕まで同類に思われてしまう。・・・もう手遅れなのか？ 逃げれるものならここから逃げたい。

キョロキョロと相変わらず落ち着かない誠也が何かを見つけたようだった。

「おい、見てみる。あの子、惚れるぞ。しかも同じ学校だ。一年かな？」

誠也の視線の先を追うと確かに同じ学校の制服を着た女の子がいた。こいつに惚れられたかわいそうな女の子はどんな子だろうと頭のとっぺんからつま先までをそれとなく見てみる。

そして、分かったことが彼女は僕とは対照的な位置にいるだろうということだ。意思の強そうな目が僕とは間逆の位置にいることを明確にしている。僕は優柔不断で通ってるから。

僕がそんなことを思っていると誠也が俺が落としてきてやる、と言つて人ごみを掻き分け彼女の方に歩いていつてしまった。

声は聞こえないので状況だけ説明しておこう。

まず誠也が声を掛ける。彼女が振り返る。明らかに迷惑そうな顔をしている彼女。そんな顔は見えていないかのように誠也は話し掛ける。彼女は首を横に振っている。

ああ、ダメだな、と思っていると誠也が僕を指差して何か喋っている。彼女がこちらを向き目が合う。たっぷり見つめ合うこと数分。彼女は顔を赤くして俯いてしまった。僕には何のことやら分からない。

そこで僕は降りる駅にいることに気付き降りた。電車から二人が降りた気配はない。あの子もかわいそうに誠也なんか惚れられたために乗り過ぎてしまった。ご愁傷様です、と思いながらも僕にはどうすることも出来ないので一人平和に学校に向かって歩き出した。

「あ、今日は良い日かも」



No.2 不幸な少女はだあれ？（後書き）

主人公の性格が未だに分かりません。（おいッ）こんな作者です  
がこれからも宜しくお願いします。

### No.3 名前発覚！それが何か？

僕の席は窓際の前から四番目にあつた。これはとてもいいことである。

そんなことを席に着いてしばらく考えていると教室のドアが勢い良く開いた。何事かと目を向けると乗り過した馬鹿な誠也だった。僕は良く間に合ったなあ、と少し感心していた。そんな僕の視線に気付いたようで、僕の席まで近づいてきた。

「おはよう」

僕は例の爽やかスマイルで挨拶する。キヤー、という悲鳴も聞こえたのでそれほど酷い顔なのかなあ、と今度鏡で見てみようと思つた。

「よくもシノブは俺を置いていつてくれたなあ」

なんだか笑顔なのに目が笑っていない。こいつはスポーツ推薦で入学するだけのことはあつて力は強い。まず腕力では僕に勝ち目は無い。

「いやいや、二人が良いムードになっているところを邪魔するのも野暮つてもんだろ」

こいつの好きな女の子の話にしておけばまず間違いなく安全だ。案の定、こいつは途端にニコニコと話し始めた。

「あの子の名前は『キンコーンカーンコーン』」

素晴らしいタイミングでチャイムが鳴り、慌てて自分の席に着く誠也。意外に真面目君である。結局名前は聞けなかったが問題は無い。

担任はカッコイイ男性教師でもなく、綺麗な女性教師でもなく、極々普通の男性教師だった。名前は・・・忘れた。その内また登場してくれることを願おう。

そんなこんなで僕はボーっと校庭を眺めていた。自己紹介なんて面倒くさいことをやり出そうという教師じゃなくて全く良かった。

しかし、委員会は決めなければいけないようで今は委員会決めをやっている。これが中々決まらない。これほど消極的なクラスもあったもんだ。まあ、僕もその類に漏れず委員会なんて面倒くさいことはやりたくない派だ。

結局最後はありきたりにジャンケンで決めることになった。こうなったらもうこちらのものである。なんせ僕はジャンケンはめちゃくちゃ強いから。僕は早々と一抜けし委員会はやらなくていいことになった。

そのあとは順調に委員会も決まり、授業も行われた。授業ははっきり言う暇である。退屈以外の何ものでもないと思った。サボりたいところを今日は初日ということで仕方なく寝て過ごした。いきなり目をつけられたことは当然である。

昼休み。僕はチャイムと同時に弁当を広げた。光が用意してくれた物である。全く頭が上がらないとはこのことだ。

「おッ、美味そうだな。俺にくれッ」

僕の弁当に目をつけた犬・・・寧ろハイエナが近づいてくる。

「こればかりはやれん。近寄るなハイエナめ」

僕がきつぱり断るとハイエナは僕の前の席のやつの椅子を無理矢

理奪い向かい合う形で自分の弁当を食べるハイエナ。自分の弁当あるなら最初からそうしろよ。

「お前なあ、最初から寝て、完璧に要注意人物になってるぞ」

「誰よりも早く名前を覚えてもらえたな」

誠也は、お前は、とかなんとか言っているが声が小さすぎて聞けない。僕が少し壊れたかなあ、と思い始めた頃にやっと復活した。

「そうだッ、朝の話ッ。あの俺と運命の出会いを果たした女の子。彼女は一年A組 御坂<sup>みさか</sup> 希<sup>のぞみ</sup>。俺の見たところ実は天然とみたな」

天然？ 僕にはもっとしっかりしてリーダー的なタイプの人かと思っただけど……。人は見かけによらないとか言うしな。僕は自分で見ないと中々信じないタイプだからこいつの言うことも信じてないけど。

「ふーん。で？」

「で、ってなんだよ。そのこんなことが言いたかったのか、って言いたそうな目はッ」

事実そうだ。そんなことを知ったところで役に立つとは思えない。

「はあ、まあいい。その子にあんまり迷惑かけんなよ。今日も遅刻しそうだったろ」

「ああ・・・あれはお前が言ってくれなかったからだろッ」

ヤバイ。朝に忘れさせたことを自分で掘り起こしてしまった。墓穴を掘るとはまさにこのことだと再確認した。

「まあまあ、今度なんかあったら気まぐれで助けてやるよ」

「気まぐれなのか？ まあいい、なんかあったら言うからな」

そう言ってニヤニヤと気持ち悪く笑った。もしかして大変なこと言っただけ？

## No.4 愛くるしい彼女

午後も変わらず退屈な授業を真面目に受けていた僕は結構偉いはずだ。

そして、今は今日の学習の時間がちょうど終わった時間である。

「シノブー、お前もバスケット部に入れッ」

こんなことを言ってくるやつは一人しかいない。誠也だ。誠也はスポーツ推薦で入ったのだ。バスケの。さすがに推薦を受かるだけのことはあって選抜にも選ばれていてそこその成績を収めていたはずだ。

「今、考え中だ」

さて、どうするか。

「何、考えてくれるのか？　今までは嫌だの一点張りだったのに・・・」

僕はそんなことに悩んでいるわけではない。

「お前は何を誤解しているんだ。僕はクラブに入るかどうか悩んでいるんだ」

中学ではクラブは全くしていなかった。しかし、今更やるのもどうかと思うし、けど何かやっておいても良いような気もする。誠也はそこからッ、とか言っているが気にしない。

「まあ、気が向いたらクラブを見にきてくれ。ゆつくり決めたら良い」

なんか誠也が微妙にいいことを言っている。これはおかしい。雪でも降るかもしれない。

「なあ、傘持ってきたか？」

用心に越したことはない。今はカラツカラに晴れているが悪い予感がする。

「いくら俺でも春に雪を降らせようとは思わないから安心しろ。じやあな」

そう言っただけで颯爽と立ち去ってしまった。やけに清々しくて逆に気持ち悪いな。僕はとりあえずどうするかだが、

「図書室へ行こう」

何故か図書室へと向かう僕。意味はない。目的もない。では何故行くのか。それはそこに図書室があるからなのかもしれない。

図書室はもう目と鼻の先にあるので寄ってみようと思っただけのことなのだ。

図書室は程よい気温で過ごし易い、快適な空間になっていた。図書室には学校の初日ということもあってなのか普段からなのかは分からないが少しの生徒しか利用していなかった。

僕は本棚の間をゆつくりと歩き、面白そうな本を探していた。次の本棚の間を覗くとそこには一番高いところから本を取ろうと奮闘している小さい女の子。背伸びする度にその長くて綺麗な蒼髪が揺

れる。僕はスツと出て行き手伝おうかと思ったが出て行くタイミングが分からない。

さて、どうしようかと悩んでいると彼女はジャンプし始めた。なんと言うかその姿は愛らしかった。

僕がしばらく見ている間に彼女は本の背表紙に手をかけ何とか取れそうだった。そして、本が取れたと思ったたらそのまま盛大にこけてしまった。僕は慌てて飛び出す。

「大丈夫だったか？」

そう言っただけ彼女に手を貸す。彼女は最初ぼんやりと僕を見ていたが僕の手には恐る恐る自分の手を重ねた。僕は彼女の小さい手を握み、勢いよく引つ張り上げる。

「怪れない？」

彼女はコクンツと頷いた。小動物を思わせるその仕草が可愛いなあ、と思った。僕は床に落ちたままになっていた本を拾い上げる。それは小さな詩集だった。

「詩集読んだね。僕はあんまり読まないから分かんないけど面白い本があったら教えてね。僕は一年D組、沖田忍。宜しくね」

好感を持たれるように笑顔でそう言う。第一印象は大事だ。彼女は分かったと肯定しただけだった。彼女は何者なのだろうか？

「只者じゃないね、君は。じゃあね」

そう言っただけ立ち去る僕。あれか？ 彼女は名乗るほどの者じゃ御座いません、というのがやりたかったのかもしれないと常識人なら



考えないことを考えていた。

外へ出るともう夕暮れだったのでクラブ見学は明日からにしよう  
と思った。入部するかどうかは分からないけど・・・。

## No.5 出会ったのは偶然？運命？

僕は今はつきり言ってかなり戸惑っている。その原因は各クラブが新入部員を集めるために勧誘をしているからだ。しかもしつこいのなんのつてめちゃくちゃしつこいんだ。

僕はこの勧誘地獄をなんとか抜け残ったのは片手に鞆。もう片方には部活の宣伝用紙。僕はその中の一枚だけを別にして他のはゴミ箱へ捨てる。

教室には既に誠也がいてなんだかむかついた。誠也はもうバスケットに入部することが決定しているからあの勧誘地獄からなんなく抜け出せたのだろう。僕は苦勞していたというのに。

僕は自分の窓際の席に座る。それと同時に誠也が前の席に座る。そして、目ざとく僕の手の中にある紙に気がついたようで紙を引っ手繰る。

「お前・・・本気なのか？」

誠也が驚愕という顔を浮かべて僕を見つめてくる。

「これが一番マシっぽいんだよ。それにいつでもサボれそうだしな」

僕が目をつけた部活はオセロ部だった。なんと驚く事無かれ部員は三年と二年を合わせて三人だ。しかも二人は幽霊部員という話だ。部活として成り立っていないのだが存在しているのだ。しかも、三人中二人は部活に来ていないのだから残りの一人は部活で一人でオセロをやっていることになるのだろうか。想像すると危ない人のよくな気がしてならない。

「サボれそうだが・・・いつか潰れて毎日サボりみたいな状態になりそうなのだが？」

やはりこの馬鹿でもそう思うか・・・。僕もはてしなくそのような気がしてならないのだ。

「今日、一回行ってみることにするよ」

それっきり僕は昼休みにご飯を食べるために一度起きただけで他はずっと寝ていたのだった。そして、今日の記憶がないままに全ての授業が終わっていた。

「さて、物理室とは・・・どこだ？」

オセロ部は物理室で活動しているようなのだが、まだ学校に通い始めたばかりなのでどこに何があるかなんて分かるわけがない。

このときばかりは自分の強運に感謝した。目の前にはこの前図書室で会った女の子がいたのだ。後ろ姿だがあの綺麗な蒼髪はあの子以外にまずいないだろうと思い、声を掛ける。

「おーい、そこ行く侍殿！ 少しばかり時間を頂けないか？」

なぜ彼女が侍なのか、僕の言葉がなぜ古めかしいのかも分からない。

「えッ？ さ、侍？」

彼女が慌てふためき左右をキョロキョロと見ている姿が可愛い。やはり小動物みたいで抱きしめたい衝動に駆られた。

「侍は君だよ」

そう声を掛けると、とうとう僕に気付いたようだった。

「わ、私？」

僕の顔を見て更に慌てふためく彼女。やっぱりとてつもなく可愛い。惚れちゃうかもね。

「そうそう君だよ。お時間頂けますか、お嬢様？」

膝を着き見上げる形で彼女を見る。彼女はめちゃくちゃ驚いていた。冗談はこのぐらいにしておこう。いい加減彼女が戸惑ってあたふたし始めたから。その姿も可愛くて少し惜しかったけど・・・。

「ごめんごめん、冗談だよ。ただ道を訊きたかったんだ。物理室がどこにあるか知らない？」

僕がそう言うと彼女は少し安心したようだった。

「そういうことだったんですか。驚いちゃいましたよ。物理室まで案内しましょうか？」

案内までさせてしまつて果たして良いのだろうか。彼女は僕が考えている間もニコニコとしている。

「じゃあお願いしようかな」

彼女の笑顔に僕は負けた。お返しとばかりに僕も笑顔を浮かべる。すると彼女は一度硬直してしまった。真剣に今度鏡を眺めてみよう、

と思った僕だった。

「こ、こっちです」

彼女は顔を赤らめながらもそう言って歩き始めた。大丈夫かなあ。熱はないのだろうか？

なぜか無言が続く僕ら。なんでだろ？

「そういえば僕の名前覚えてる？」

これで忘れました、とか言われたらショックを受けますよ。しかし彼女は勢いよく答えてくれた。

「も、もちろんですよ。沖田君ですよ」

慌てながらも笑顔は崩さず答えてくれる彼女。ん、天使かも。

「シノブで良いよ。僕たちもう友達でしょ？」

彼女がいつの間に？、って眼差しを向けてくる。

「僕は最初からそう思ってただけど……。君は友達になってくれないの？」

僕は少しシユンってなりながらそう言う。すると名も知らぬ彼女はすごい勢いで首を振る。やっぱり可愛い。妹の光と同じように頭をクシャクシャツと撫でたくなった。いつか撫でてやろうと思った僕だった。

「ありがと。ところで僕は君の名前を知らないんだけど……」

そう言つと彼女はいきなりしまった、という顔になった。感情がとても豊かだと思った。いつまでもこの顔を見ていたいと思つたり・

「すいません。私すっかり自分は名乗つたものだと思つてました。  
私は榎本蒼美です。えのもと そつみなんとも呼んで下さい」

なんとも、と言われると困るような気がする。なんたつて僕は優柔不断で通つてゐるから。

「じゃあ気分で榎本、蒼美、姫を使い分けよう」

さすが僕。あらかじめ逃げ道を用意しておく方法を取るとは自分でもびっくり。

「姫ですか？」

なるほど。そこに食いついたか。なんとなく姫オーラが出てるよ  
うな気がするんだよな。

「まあまあ、良いじゃないか。蒼美は部活はするのか？」

昨日も今日もふらついているので気になったことだ。

「そうなんですよねえ。どうしようかなあ、と思つてゐんですよ。  
はい、物理室ですよ」

少し名残惜しそつに蒼美がそう言つ。そんな目で見られるとなあ。

「蒼美はもう帰るのか？」

蒼美が少し考えてコクリと頷く。さらに訊くと彼女は電車通学でこれまた同じ方向だった。

「じゃあ、二人で帰ろうツ。蒼美のことをもっと知りたいしな。物理室はまた今度だ」

昨日に引き続き今日も会ったのはもはや運命というに相應しい、というわけの分からない理由を付け、無理矢理帰ることにした。

「蒼美、今日はおかげで楽しかったよ。またな」

帰り道は二人のことをお互いに話した。蒼美は良く笑ってくれてとても楽しかった。電車は僕の降りる駅の方が早かったので最後にそう言っ、電車を降りた。

この時間帯にこの駅で降りたのは僕だけだった。今日は変態の被害もあまりなく、蒼美と仲良くなれ、とても良い一日だった。さてさて、明日も平和でありますように・・・。

## No.6 蒼髪の君

雨。それは今日の昼休みから唐突に降り始めた。朝は雲一つない快晴だったというのにだ。

おかげで僕は今日は濡れて帰ることが必須だ。もちろん置き傘なんて気の利いたものはない。

クラスメイト達で外で行うクラブの奴等は喜んでるし・・・僕は対象的だ。因みに僕はオセロ部には結局入部しなかった。

・・・今思い出すだけでも身震いしそうになる。部長が一人オセロをしている姿。物理室のドアを開けて目が合って、瞬間後ずさりして一目散に逃げたのだ。部長はフッフッと一人で笑っていたのも悪かったのかもしれない。

僕のトラウマの一つになったことは言うまでもない。物理室がとてとてもとても苦手になりました。

雨は降るし、嫌なことは思い出すしで僕は少しブルーな気分になるわけで・・・、

「シノブ、お前傘忘れたのか？ 俺もだ」

アハハッと笑いながら近づいてくる奴はいつもどおり空気を読めないわけで・・・鬱だあ。

「おいおい、止めるよその嫌そうな顔は」

おやッ？　いくら空気が読めないとは言ってもこのぐらいなら分かるのか。全くもって意外だ。

「お前、今かなり失礼なこと考えてないか？」



誠也が気持ち悪い流し目で睨んでくる。実に不快だ。その目と雨が相乗効果をもたらしてくれる。不快度指数が右肩上がりですよー。いかん。テンションがおかしくなってきた。

「あつ、今廊下をすつごい美人が通った」

僕がおもむろにそう言うとき誠也はすごい勢いで教室から飛び出した。

さすが女好き。僕にはそんな行動力ない。そんなに本能に忠実には生きられない。いや、煩惱か？

もちろん美人さんは架空の人物です。鬱陶しい奴がいなくなつてやっと一息つけた昼休み。

眠りについた忍を熱っぽく見つめる多くの視線に忍が気付くことはなかった。

「……ろ……起……ろ……起きろー」

がばつと頭を上げてまず目に入っただのは誠也の顔。寝起きにそんな顔見せるな。

それはともかく僕は何時の間に寝ていたのだろうか？そして何時の間に放課後に……謎だ。

「放課後になつても起きねえから起こしてやつたんだぞ。崇<sup>あが</sup>めよ。称<sup>たた</sup>えよ。敬<sup>うやま</sup>えよ」

仰け反つて偉そうに言う誠也。

「わあゝ、ありがとう」

もちろん気持ちなど込めずに棒読みで単調に言う。鞆を持ち誠也をことごとく無視しながら教室を出た。後ろで忍は放置プレイが好きなのか？、という声が聞こえた。こんなシーン前にもあつたような気がしたが思い出せない。まあ、対して大事なこともないからやっぱり放置。

僕が滑りやすい階段に注意しながら一番下まで降りると、

「わっ」

という短い悲鳴が階段の上から聞こえた。ほぼ反射的に振り向くと空中に投げ出され落下中の男子生徒。

僕は直で落ちたら骨折はするだろうなあと思いながらもその男子生徒を受け止めた。僕は相当な衝撃を覚悟していたのだが伝わってきた衝撃は極々軽いものでそっちの方にびっくりしたほどだ。おまけに背も僕の顎ぐらいまでで顎を置くのに丁度よさそうな身長だった。

「おいッ、大丈夫か？」

衝撃がこなかったことに驚いていた様子の男子生徒だったが僕と目が合うとボーっと僕の顔を見てきた。この反応も最近どこかであつたような気がする。

「・・・好き・・・」

僕はどこでこんなシーンがあつたのかを必死に考えていると男子生徒は一言呟いた。僕は考え事に夢中で聞き逃してしまったのだ。ど。

「ごめん。聞き逃した。怪我はないんだな？」

綺麗な蒼髪の生徒が今度はコクリと頷いた。この仕草もどこかで・・・まあ、考えるのは後でも出来る。そう算段をつけ小さい男子生徒に目をやる。

「雨の日は滑りやすいんだから気をつけないとだめだろう？　まあ、怪我が無くてなによりだよ」

そこまで言つて僕はまだ男子生徒を自分の腕の中に入れていることに気付いた。僕が手を放すと男子生徒は小さくアツと言った。

「どうした？　もしかして怪我してたか？」

心配してそう聞くと何でもないツと言った。

「助けてくれてありがとう。僕、えのもとそうが榎本蒼華つていうんだ。君は沖田忍君でしょ」

榎本という名字に一人心当たりがあるのだが・・・、それに蒼髪も仕草も身長も名前に蒼が入っていることも・・・親戚？　それに僕の名前をフルネームで知ってるし。

「ええと、蒼華で良い？ 僕も忍でいいからさ」

そう言つと蒼華は嬉しそうに笑ってくれた。

「そうだ。シノブ、少し<sup>かが</sup>屈んで？」

そんな笑顔で言われて逆らえる奴がこの世にいるだろうか。僕は蒼美との関係を聞くことなんか忘れて屈んだ。

『CHU』

ん？ ン？ この子は今何を。顔に熱が集まるのが分かる。蒼華はエヘヘと眩い笑顔をしてるし・・・僕にどうしろとッ。僕が戸惑っていると蒼華は少し僕から離れてこちらを向き、

「また明日ね、シノブ」

そう言つて手を振る蒼華に僕は黙つて手を振るしかなかった。・・・そりゃあ啞然と・・・。

## No.7 小悪魔でしたか・・・

馬鹿な、馬鹿な、馬鹿な。

僕は今日も遅刻することなく学校に着き。教室の扉を開けた。うんうん。ここまではいつもの日常だった。

扉を開け、一歩踏み出したところで目の前に現れたのは榎本蒼華。百歩譲ってたまたまでしょう。しかし、

『CHUッ』

これはたまたまじゃない。キス魔か。蒼華はキス魔なのか？教室が悲鳴に包まれるのにそう時間はかからなかった。それはそうだ。蒼華が例えキス魔だとしても蒼華は間違いなく良い男の部類に入るのだから。

「おはよう、シノブ」

純度100%の笑みを浮かべて挨拶してくる蒼華。僕は少し疲れたようにああ、と答えただけにとどめておいた。いまだざわめく教室の中を歩き自分の席に着く。そして、当然とばかりに僕の足の上に座る蒼華。

「お前、軽いな。ちゃんとご飯食べてるか？」

僕の足の上で寛いでいる蒼華にそう聞く。

「食べてるよお」

語尾にハートマークがつきそうな勢いでそう答える蒼華。

「そのわりには背も小さいし細いよなあ」

腕なんか力を入れられたら折れてしまいそうなほどだ。お兄さん心配・・・ごめん、弟がいたらこんな感じなのかなあーと。光も細いしね。まあ、大体女の子は細いけど。

「まだ成長するの」

そう言ってプクウツと頬を膨らませる蒼華。蒼美とダブって仕方が無いのだが・・・頭をくしゃつとしたくなる。

「けど、蒼華はこのままでもいいかもな」

蒼華が何でつと言いたそうな顔を向ける。

「抱きやすいから」

そう言つてにこつと笑う忍に蒼華はもちろん、それとなく聞き耳を立てていたクラスメイト達は思わず顔を赤くした。

僕は急に硬直した蒼華の前で手をブラブラ。そうしていると蒼華が我に戻ったのが分かった。

「どうした蒼華、考え事か」

蒼華は曖昧に頷いただけだった。

「そうだ。蒼華携帯持つてる？」

そう聞く僕に蒼華はうんツと頷いた。

「じゃあ、電話番号とか教えてよ」

その途端教室中が静かになったのが分かった。

「どうしたの？ 皆？」

「（皆、シノブの電話番号とかが知りたいんだろうに・・・）」

蒼華は教室が固まったことなどお構いなしに首をかしげている僕から携帯を奪って赤外線当ててた。蒼華はこの空気が分からないんだろうか？ まさか誠也と同じ部類なのか？ とか勝手な考えを巡らせていた忍であつた。

「そついえばさあ、蒼華って蒼美って知ってる？」

不意に頭をよぎった質問を試みる。ずっと聞けなかったから良い機会だ。

「えっ、蒼美と僕は双子なんだよ。知らなかった？」

そう言つてコテンつと首をかしげる蒼華。はい。知りませんでしたとも。けど双子なら髪の色とか仕草とかが似ててもおかしくはない。身長は別かな？

「そうだったのか？ というよりやっぱりか」

『キーンコーンカーンコーン』

うむ。すばらしいタイミングだ。まるでどこかでこの様子を見

ていたように。

「ほら、チャイムも鳴ったし教室に帰らないと」

そう僕が言っていると蒼華はきょとした顔をした。何言ってるの？  
みたいな。

「何言ってるの？ 同じクラスだよ。しかもこの席の前の前」

同じクラスなだけでも驚いたのに、僕の席の前の前だと。榎本・  
えのもと。沖田・・・おきた。えとおだ。ありえなくはない。知  
らなかった。

「いや、そういえばどこかで会ったような気がしてたんだよ」

アハハッと干からびた笑いをする。

「バレバレだよ。気付いてなかったんだね」

そう言って瞳を潤ませる蒼華。えっ？ これは僕が全面的に悪い  
よな。絶対に。

「すまん。何でもするからさ、泣くだけは止めてよ。僕まで悲し  
くなっちゃうからさ」

客観的に聞けば口説いているように聞こえなくもないセリフを軽  
々言つてのける忍。本人はただ必死なだけなのだが。

しかし、蒼華に何でもするとは願っても叶ったたりだったのですぐ  
に笑顔を取り戻した。



「何でもだね」

僕はその言葉にウッと詰まるが諦めてああ、と言った。なんか失敗した気がするの僕だけなのだろうか。僕が肯定の言葉を発したことに喜ぶ蒼華は純粹に可愛いと思った。

「で、願いとは？」

僕はなるべく楽なのがいいと思いながら聞いた。あと金銭的なものも止めておいて欲しい。

「ん、考えとくよ」

そう言って自分の席に座る蒼華。このドキドキ感をいつまで味わえというのでしょうか。蒼華サンツ。

その日一日ドキドキしながら待っていた忍だったが蒼華はじっくり考えると言ってクラブに行きました。

「生きた心地がしないんですけど・・・」

いつ何時、無理難題を言われるかと思うと心が休まらない忍でした。

「蒼華・・・切実に・・・迅速に・・・決めるか忘れて下さい」

思わず心の声が出ていることに忍自信は気付いていない。・・・滑稽・・・？

No. 7 小悪魔でしたか・・・（後書き）

何故か路線が変わってきてしまっているので次では必死に戻したいと思います。

個人的には蒼華君は好きですよ。  
では、また。

No. 8 濃い日曜日（前書き）

今回は短くなってしまいました。・・・それだけかな？ 訊くな  
よッ。

No.8 濃い日曜日

僕は待ちに待った休日のをんびりまったりゆつくりと寝てすごそうと計画していたのに・・・、愛しの妹君がお友達をたくさん家に招待したようで階下がうるさいです。

僕はのっそりと起き上がって服を着替えた。ズボンも上着も僕のサイズより大きいものを着ている。なぜかという僕はゆつたりとしている方が好きだからだ。しかし、反省もしている。上着から手が出ないのだ。これはさすがに失敗したなあと思ったけどこれはこれで面白いので放置してある。

そして、僕は朝食というよりは昼食を食べるために台所に向かった。光達はなぜ光の部屋で遊ばないのかなあ、と思いながら食材を確認。

「光達はとうすんだろ・・・」

ふと思った疑問である。僕は料理は作れないことはないが光の方が得意なので光達が家でなにか食べるなら一緒に作ってもらおうと考えたのだ。

「光、お前昼飯はどうするんだ・・・」

何も考えずにドアを開けてそう聞くと妹達は出かける準備完了という感じで立ち上がった。固まる光達・・・なぜ？

「お、お兄ちゃん。私たちこれから外で食べようって言ってたところなんだよね。ねえ皆」

悶々と考えていると光が慌て気味にそう言って皆に問うた。

「「ううん」「

そう言つて光の友達二人は首を横に振った。意見が合致していないのですが・・・。

「えっ。何言つてるの二人とも」

光の慌て気味が大きくなったように感じながら僕は傍観者になっている。

「いやあ、急に光の手料理が食べたくなくてさあ」

「そうそう、お金もかかるじゃない」

そう言つてソファに座るお友達二人。視線は僕に向けられていますけど。

光はもう諦め気味。その内良いことあるさ光。

「あのさ二人は光の友達だね。僕は光の兄で忍しのびていうんだ。光変なところでおっちょこちよいだからさ心配なんだよねえ。迷惑かけてない？」

光の頭をポンポンと叩きながら聞く。うん、光の髪は今日もサラサラだと思いながら。

「いえいえいえ、慣れてますから」

そう笑いながら言つたのは活発そうな女の子。光はそんなことな

い、と怒っていたけど。

「そうですね。光のおっちょこちょいは面白いですよ」

これまた何か思い出しながら言ったのか笑っている少女。この娘もまた活発そうだ。光は友達二人にそう言われて少し恥ずかしそうにしていた。

「まあ、相変わらずということだな。ところで二人は？」

「光と同じクラスの香芝<sup>かしはみなと</sup>湊です。湊って呼んでください」

「私も同じクラスの矢形<sup>やがたなほ</sup>菜穂です。菜穂でいいですよ」

フレンドリーな二人らしいことが分かった。

「こちらこそ宜しく、湊に菜穂」

笑って挨拶をしたのだが空気が・・・時間が止まったのが分かった。物音一つ立たないこの空間。こういうのって最後に何か言った人が大抵原因なんだよな。

「いや、その・・・宜しくしなくなかった」「宜しくお願いします」  
「んだ・・・宜しく」

この二人なんだかんだで息ぴったりな気がする。ところですっかり忘れ去られた昼ご飯は？

「そうだ。お兄さんも遊びましょう」

「光は昼ご飯宜しくねえ」

そう言つて僕は着席、光は退出させられた。沖田兄妹なんだか二人に振り回されてます。結局二人は夕ご飯まで食べていつてそれから渋谷と歸つていきました。なぜ渋谷なのかは分からなかったけど・・。

軽く説明しておくとおのの後昼ご飯までは二人と談笑。それから四人でトランプなど・・王様ゲームはきつかったただけは言つておこつ。そして四人で夕ご飯の買い物に行つて、仲良くクッキングタイム。菜穂ちゃんは料理は上手だったけど湊ちゃんは・・壊滅的デシタ。これだけは言つておこつ・・パワフリヤ 二人の相手はとても疲れた・・平日よりも疲れた日曜日デシタ。

## No.9 小悪魔再来です（前書き）

更新ずっとできませんでした。

これからはなるべく間を空けないように頑張りたいです。  
言い切れない不甲斐無さ。



## No.9 小悪魔再来です

体育館。ダムダムとボールをドリブルする音とシューズがキュツキュツと立てる音が体育館を支配する。そう、今は体育館でバスケットをしているのだ。

コートは二面で男子と女子に分かれてしている。

そんな中、僕はコートをポテポテと歩き回る。僕のいるチームはバスケの推薦で来たラッキー野郎誠也がいるのではっきり言って余裕なのだ。

相手チームはすごい汗だくになりながら走り回っているが僕は汗一つかいていない。

「シノブッ」

誠也が面倒くさいことに僕にパスしてきた。僕はパスを貰ってすぐにシュートする。綺麗な弧を描いたボールはリングに当たることなく入った。相手チームがショックを受けてる。

「バスケは割と得意なんだよね」

そうニヤリとしながら言う。絶望を感じている相手チームには悪いとは思ったけどね。そう思っていると後ろから衝撃がきた。何とかが倒れることなく踏ん張れた僕は振り向くとそれは蒼華だった。

「かつこよかったよお」

満面の笑みでそう言う蒼華。花が咲いたようなとはこういうことを言っんだと分かった気がした。

「やっぱシノブ、バスケット部に入れよ」

誠也がそう言う。僕にはそんな考え毛頭がない。

「違うよ、誠也君。シノブは美術部に入るんだよ」

いやいやいや、断じてそれも違うぞ蒼華。因みに蒼華と誠也は地味にお友達だったりする。何でも蒼華の前の席が誠也だそうだ。そう考えると僕たちって番号近いな。

「僕は万年帰宅部だ」

僕は高校生活を部活でエンジョイするつもりはない。別に部活をやってる奴を批難しているわけではないから安心してくれ。二人は声を揃えて異を唱えるが僕には聞こえないよお。

「シノブ、美術部に入ってよお。僕以外は皆女の子ばかりなんだもん」

その女の子達の中には蒼華目当てで入った子もいるんだろうなあ、と思う。そもそも僕に美的センスなんてない。

「絵は下手なんだ」

そう言うつと蒼華はにこつと笑った。

「大丈夫。僕が手取り足取り教えてあげるよ。下手なら上手くなれば良いんだし」

手取り足取りに妙な感じを受けたのは僕だけだろうか？ 周りを

見て僕と目が合うとあからさまに目をそらされた。

「じゃあ、この前のお願い使っね。とりあえず今日美術部に行っ  
てさ、見学しよう。決めるのはそれからでも良いでしょ」

蒼華・・・覚えていたのか。僕はてっきりもう忘れたものだと思  
っていたのだが。自分で約束を破るわけにもいかないし、とりあえ  
ず見学だけで良いみたいだから行くしかないよなあ。蒼華も願いで  
入部させることはせずとりあえずは見学と気遣ってくれてるし。

「仕方ないな」

そう言っとうと今まで心配そうに僕を見ていた蒼華が嬉しそうに微笑  
んだ。抱きつくというオプション付きだが。

ずるずると腕を蒼華に掴まれ・・・いや捕まれか？ とりあえず  
蒼華に連行中の僕です。それというのも僕がすっかり約束を忘れ去  
り帰りそうになったから。確かに僕が悪かったね。

蒼華が美術室のドアを開け僕を中に引き込む。

「新入部員候補を拉っ・・・連れてきましたー」

大きな声でそう言う蒼華。今絶対拉致って言ったよね。自分で言っちゃうんだ。それに一応候補だけど見学って言って欲しかったな。ともかく蒼華の声で僕に向けられた視線を感じるのです。そして近づいて来る人は恐らく先輩。

「ようこそ。私は部長の咲鞍蝶さくらあひだと言います。因みに二年生です。今の三年生はいないので」

という咲鞍先輩。てことは美術部は一年生と二年生しかないことになる。大変だ。因みに咲鞍先輩は多分おしとやかタイプだと思う。

「えー、見学に来ました沖田忍です。宜しくお願いします」

スマイルは無料で。後、見学の部分は強調して。

「部活動と言っても美術室で絵を描いたり、写生をするぐらいです。から気軽で良いんですよ。それに部員が増えることは良いことです。から入部をお待ちにしています」

そう言って立ち去る咲鞍先輩。なんていうか教養ありそう。

「僕が描いた絵見せてあげるよ」

そう言っでぐいぐい引張る蒼華。そうしてどこから取り出したスケッチブック。少し恥ずかしそうにしている。確かに自分の描いた絵を人に見せるのは恥ずかしいよな。僕とかは下手だから尚更無理だ。僕は受け取ってパラパラと見てみる。

「空だな」

蒼華が見せてきたスケッチブックには空の絵ばかりが描かれていたのだ。それは青々とした空だったり、白い雲に覆われた空だったり、夕焼けだったり、

「温かいな」

蒼華はドキドキ顔をどういうこと、っていう目をさせながら見ている。僕にもどういふことかは分からないが出てきた言葉は温かいだった。

「僕も分からないけどさ、蒼華の絵を見てたら温かい気持ちになったんだ。僕は好きだよ、蒼華の絵。素人がこんなこと言っているかは分からないけどね」

僕がそう言うのと蒼華は破顔させた。安心したような嬉しそうな顔。蒼美と一緒に表情豊かだ。

「ありがと。やっぱり僕、シノブが好きかもしれない」

そう言っ て顔を赤らめる蒼華。

「僕は好きだけど」

蒼華とは会ってまだ少ししか経ってないけど誠也よりは好きだ。これは間違いない。

「（シノブのは友達としてなんだろうなあ。そういうの鈍そうだし・・でも）僕も好きだよ（今はこれで満足）」

なんだか急に蒼華がニコニコし始めた。笑ってた方が良いのは確かだけ。

「そうだ。部を案内しないと」

そう言っ僕からスケッチブックを引手繰った蒼華。そういえば、

「なあ蒼華、部員今何人ぐらいいるんだ」

三年生はいないことは分かってるけど、一二年生は？という疑問である。

「一年生は僕をいれて二人、二年生は三人だよ。今のところ何とか五人はいる状況だね」

てつきり蒼華目当ての女の子とかが多そうだと思ってたのに意外だった。少数なんですね。

「どんな人たちのの？」

素朴な質問だったのだが蒼華は答え難そうだった。

「もう一人の一年生は御坂さんっていう女の子で良い人だよ。二年生は部長は分かるよね。残りの二人はなんと言うか夫婦？」

いやいやいや、聞かれても困るんですが。しかも夫婦。結婚は出来ない年齢だし。許婚とかか。

「説明し辛いんだよね。まあいちゃいちゃしてる二人組みって覚えておいてくれれば良いよ」

苦笑しながらそう言う蒼華。個性的な人たちの集まりと思っておけばいいだろう。

「御坂さんって聞いたことないな」

僕がボソツと呟いた言葉に蒼華は大げさに反応した。まさかまた同じクラスだったとか。二回目はさすがにまずいなあと思っていると、

「シノブ知らないの？ 御坂さんを知らない人がいたとは・・・そっちの方が珍しいっていうかありえないよ」

蒼華にありえないって言われてしまった。そんなに有名なのか。時代遅れの人間だと言うのか。

「それは避けたい。蒼華、その御坂さんって人にあつておこつ」

僕の言葉にハテナマークをとばしながらも案内してくれた。着いたのは屋上。御坂さんは大体屋上で絵を描いているらしい。

放課後という時間に屋上にいる生徒は一人だけですぐにあれが御坂さんだと分かった。

「希ちゃん」

蒼華がそう叫ぶと僕たちに背を向けて手を動かしていた御坂さんは振り向いた。そして、僕はその顔に見覚えがあった。

「ああー。誠也にナンパされてたかわいそうな人じゃないか」

いつぞや電車の中で誠也がナンパしていた人だった。僕がそう言うところ蒼華はそうなの？って顔で御坂さんを見てるし、御坂さんは何のことが分かっていない様子。

「いつかさ、電車の中でナンパされて乗り過ごしてたでしょ」

そこまで言うと言点があつたのかああ、と手をパンつと合わせながらそうでした、と言った。

「あの時は大変だったんですよ。何とか学校には間に合ったから良かったですけど、あれだけ必死に走つたのは久しぶりでした。おかげで良い運動になりました」

にこつと笑いながら言う御坂さん。最後のは怒るところだと思つのは僕だけなのだろうか。そう思つて蒼華を見ると苦笑気味。なるほど、確かに良い人だ。

「ところであなたは？」

うん。やっぱり少しずれてる気がする。普通は一番に聞くところだと思つた。

「僕は沖田忍です。美術部の見学です」

そう言うてにつこり笑うと御坂さんはピシッと固まった。僕が笑うと必ず何かが起こるのは何の因果なんだろう。帰ったら光に聞いてみよう。



「そうですか。美術部に入ってくれるんですね。私は御坂希みさかのぞみと言います。宜しく願いしますね」

なんだろう。美術部に入ることが決定しているような物言いは。

「一応見学なんだけど・・・」

そう言うつと蒼華が少し笑ったような気がした。御坂さんは納得顔。

「美術部の部長は気に入った人しか入部も見学もさせてくれないんですよ。因みに部長の中では見学〓入部の方程式が完成してますから」

そう言うつとニコニコしている御坂さん。

「逃れる方法は？」

僅かな望みをかけてそう問うと、

「ありません」

きつぱりと言い切られました。蒼華・・・やっぱり君は小悪魔だったんですね。

僕たちが屋上から帰ると美術室には部長がいて、すぐさま入部届を書かされたのはいうまでもありません。部長はおしとやかタイプではありませんでした・・・騙された。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9070c/>

---

気分屋な僕

2011年1月9日03時30分発行